



Title	ハンガリーの政治的議論の場における1918-20年史の位置づけ
Author(s)	青山, 瑞季
Citation	ハンガリー研究. 2023, 2, p. 99-108
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90934
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ハンガリーの政治的議論の場における 1918-20 年史 の位置づけ

青山瑞季

1. 本稿の目的

2022 年 4 月のハンガリー議会総選挙では、政権与党のフィデス・ハンガリー市民同盟(以下フィデス)とキリスト教民主国民党の与党連合が、2010 年以來 4 回連続で勝利した。全 199 議席中、与党連合が 135 議席、野党連合が 56 議席、2018 年に結成された極右政党「我々の祖国運動」が 7 議席を獲得した(『ビジネス短信』2022 年 4 月 6 日)。フィデス党首であるオルバーン・ビクトル首相²の 2010 年から続く強権政治が、今なお多くの国民に支持されていることが示された。また、今回の総選挙には 2022 年 2 月 24 日から始まったロシアのウクライナ侵攻が大きな影響を与えた。選挙期間中、野党連合がロシアへのエネルギー制裁強化を訴えると、オルバーン首相はエネルギー制裁が国民生活に与える悪影響を主張した。ウクライナ侵攻が始まる前からオルバーン首相は反 EU・親ロシア的な姿勢を示していたが、総選挙後はロシア寄りの姿勢をより強く示すようになり、EU との溝もさらに深まっている。

このような昨今のハンガリーの政治情勢を踏まえつつ、ハンガリーで「国民的悲劇」と語られている 1920 年のトリアノン条約による領土解体と、それに先立って起こった 1918-19 年の革命が昨今のハンガリーの政治的議論の場でどのように扱われているか整理する。そして 1918-19 年の革命期を研究している筆者が、今日のハンガリーにおいて 1918-19 年の歴史的意義を問い直すことにどのような社会的意義があるのかについて考えてみたい。

2. 1918-19年革命期の概要

本論に入る前に、1918-19年の革命期の概要を簡単に整理する。第一次世界大戦末期の1918年10月、戦争の終結やハプスブルク帝国からの独立、国内政治の民主化などを目指して革命が起こり（以下「十月革命」¹⁾、大貴族カーロイ・ミハーイ（1875-1955）を党首とする通称「カーロイ党」、知識人ヤーシ・オスカルを党首とする市民急進党、社会民主党による連立政権が成立し、カーロイが首相となった。カーロイ政権は普通選挙の実施や土地改革など内政の民主的改革を目指すとともに、第一次大戦の講和条約の締結、そしてハンガリーの領土保全を目指した。しかし敗戦国であるハンガリーにとって領土保全は困難となり、さらに内政の改革に遅れが生じたことで国民の不満も募り、樹立からわずか5ヶ月後の1919年3月21日に政権は崩壊した。その後共産党と社会民主党の左派・中央派による共産主義政権が成立したが、これもわずか5ヶ月で崩壊し、その後はホルティ・ミクローシュを摂政とした権威主義的体制が20年近く続いた。

3. 「連帯の日」のデモ

オルバーン政権は政権樹立直後の2010年5月31日、トリアノン条約が調印された6月4日を「国民連帯の日」と定める法律を可決させた。以来、毎年6月4日には各地で様々なイベントが行われる他、右翼によるデモも起こっている³⁾。オルバーン政権はこの「連帯の日」を、トリアノン条約による国境変更で「周辺国の領域に入ったハンガリー人及びその地域を含めて、国境を越えた全ハンガリー人の連帯」（Magyarország Nagykövetsége Róma ホームページ）を確認する日としている。

2022年の「連帯の日」に見られたデモは、ロシアのウクライナ侵攻の影響を色濃く反映していた。極右政党「我々の祖国」をはじめとする右翼団体は例年「連帯の日」にデモ行進を行っていたが、2022年はウクライナ大使館の前に集結してデモを行った。彼らがウクライナ大使館前に集結した目的は、ウクライナ侵攻をめぐるゼレンスキー大統領の対応を非難し、さらにトリアノン条約による「悲劇」がゼレンスキー大統領に

よって再び起こりつつあると主張することであった。300 人近くが集まったこのデモでは、いくつかの右翼団体の代表者が演説を行った。「ハンガリー自己防衛運動」という団体の代表であるラースロー・アッティラは、トリアノン条約調印前のハンガリー領土（いわゆる「歴史的領土」）を取り戻すという目標は領土修正主義的なものではなく、実現可能な未来像であるとし、今日においてはヨーロッパ文明が生き残るための唯一の方法であると主張した。そして、「悪魔のような現在の世界秩序は、新たな「トリアノン」を求めている。それはハンガリーのトリアノン条約ではなく、西欧・北欧の文明の排除を意味する「トリアノン」である。」と述べた。ここで彼らの言う「トリアノン」とは、ユダヤ系の共産主義者や西欧の戦勝国によって 1920 年にハンガリーが分断されたように、ユダヤ系のゼレンスキー大統領や EU を率いる政治家をはじめ、様々な国際的な権力者によってヨーロッパ文明が分断されようとしていることを意味していると考えられる。ラースローは、ハンガリーこそがヨーロッパ文明を担い守りうる唯一の国家であり、ハンガリー領土を取り戻しハンガリーの国力を強くすることでしか、ヨーロッパ文明の崩壊を防ぐことはできないと考えているのである。

続いて、「義賊部隊」という団体を代表して演説したティリチャー・ジョルトは、ゼレンスキー大統領を 1919 年のハンガリー共産主義革命の中心的人物であったクン・ベーラに例えた。ティリチャーは、共にユダヤ系であるゼレンスキー大統領とクンの共通点として、どちらも「背後にいる国際的な権力や、ハゲタカ資本のために働いている」点であると主張した。すなわち、ティリチャーらは、ゼレンスキーもクンも、外国の利益を自国に持ち込み、自国を破滅に導いていると考えている。さらにティリチャーは、ロシア側がウクライナに侵攻した理由として、ロシアに対してウクライナ人が大量虐殺を行ったという、ロシア側による「フェイクニュース」(Telex. 2022.2.26.) に言及しながら、ロシアのウクライナ侵攻の正当性を主張した。さらに、ウクライナ人はロシアではなくゼレンスキー大統領にこそ武器を向けるべきであるとも主張した (Telex. 2022.6.5)。

各代表によるスピーチの後は、デモの参加者らが歴史的領土内に存在した全 64 県の名前のプラカートを掲げて行進をした（写真 1 参照）。



写真 1（筆者撮影）

オルバーン首相は 2016 年 3 月 15 日に行った 1848 年革命の記念演説で、今日 EU やグローバル資本などの外敵がハンガリー国民を脅かしているように、クン・ベーラの 1919 年の革命も、ハンガリーを弱体化させたいと考える外敵によって引き起こされたものであると述べていた（Speech by Prime Minister Viktor Orbán on 15 March; Jobbit 2019-2020:68-69）。2022 年のウクライナ大使館前のデモでは、右翼団体はこの「ハンガリーの利益を脅かす外敵」、すなわち EU や西欧諸国、そして 1919 年の共産主義者と、ゼレンスキー大統領を同一視していたのである。

4. 戦間期と今日の政治的議論の場における 1918-19 年の位置づけ

オルバーン政権樹立後のハンガリーで、トリアノン条約や 1918-19 年の革命期をめぐる展開されている議論は、ホルティを摂政とした権威主義体制下の戦間期に展開された議論に起因する。

ホルティ体制下の戦間期には、1920 年のトリアノン条約締結による領

土解体は 1918-19 年のカーロイ政権及び共産主義政権に責任があると考えられた。カーロイの歴史的領土解体の責任を問うべく「カーロイ裁判」が行われ⁴、共産主義者らは「白色テロル」によって迫害された⁵。カーロイ政権及び共産主義政権に関わった政治家らは国外への亡命を強いられることになった。学校教育の場でも、例えば歴史教科書で 1918-19 年の革命期について「これほど悲しい時代はこれまでのハンガリー史にはなかった」と書かれるなど、1918-19 年の革命期の出来事が子供たちに否定的に教えられた（Gál stb.(szerk.) 1929:117-118 など）。

第二次世界大戦直後の人民民主主義期（1946-1949 年）にはそれまで亡命していたカーロイの帰国と名誉回復が実現し、「十月革命」の再評価が進んだが、その後社会主義期（1949-1989 年）に入るとカーロイは再亡命した。社会主義期中盤の 1960 年代から 1918-19 年に関する研究が増え（Hajdu 1968; Litván 1977; Hajdu 1978 など）、さらに 1975 年にはカーロイの銅像が国会議事堂前に建てられるなど、1918-19 年の革命期が評価されるようになった。特に 1980 年以降になると、共産主義体制への批判が高まったことを背景に、共産主義に批判的であったヤーシ・オスカールに関する研究が盛んになり（辻河 2012:50）、彼がカーロイらとともに中心的役割を担った「十月革命」に関する研究も一層増えた。

体制転換後も「十月革命」を評価する傾向は見られたが、オルバーン政権が樹立される 2010 年以降、政府によって保守的な歴史観が強く示されるようになった。まず、前述したようにオルバーン政権樹立直後、6 月 4 日を「連帯の日」とすることが定められ、さらに、国会議事堂前の広場を 1944 年以前の状態に戻すことが目指された。これによってカーロイの銅像は撤去されることになった。与党をはじめとした右派はカーロイを領土解体の責任者とみなし、彼の銅像の撤去を主張したのに対し、カーロイ像の撤去に反対する野党を中心とした勢力は、カーロイを民主主義的な改革の先駆者とみなしていた⁶。最終的に撤去が決まり、現在カーロイ像は銅像の制作者である彫刻家ヴァルガ・イムレの故郷シオーフォクに移動している。カーロイ像の撤去後は、第一次大戦期に首相を務め、二重君主国期のハンガリーを代表する保守的政治家であり、カ

ーロイの政敵でもあったティサ・イシュトヴァーンの銅像が建てられた（写真2参照）。さらに2020年8月には、国会議事堂近くにトリアノン条約の悲劇を語るためのモニュメントが建てられた（写真3参照）。前述の2016年の1848年革命記念日に行われた演説が象徴するように、オルバーン首相による演説でも、1918-19年が否定的に語られてきた。この演説では、クン・ベーラを、ハンガリーを弱体化させた外敵であると言い、続けて、ハンガリー史にとって真に重要で輝かしい革命は1848年革命と1956年革命の二つであり、1918-19年の革命は反ハンガリー的なポリシェヴィキという外敵がもたらした災いに過ぎないと述べた（Speech by Prime Minister Viktor Orbán on 15 March; Jobbit 2019-2020:68-69）。



写真2（左）と写真3（右）。トリアノン条約のモニュメントには、「歴史的領土」に存在した全ての地名が彫られている。（筆者撮影）

このようにオルバーン政権による1918-19年に関する議論は、戦間期のホルティ体制下に展開された議論に起因したものである。カーロイ像の撤去をめぐる撤去賛成派と反対派の対立は、戦間期に見られた反カーロイ派とカーロイ擁護派の対立と同様であった。戦間期、カーロイ政権に携わった政治家が亡命先あるいは国内で、カーロイ政権で試みられた

民主主義的改革の正当性を説き、領土解体がカーロイ政権の責任で起こったことではないと主張したことで、カーロイに責任があると考え国内の主要政治家と対立した。結局、オルバーン政権下のカーロイ像撤去をめぐる対立で撤去反対派が敗れたのと同様に、戦間期においてもカーロイは裁判で有罪判決となり、カーロイ及び彼の支持者はこの対立で敗北した。

5. 1918-19年の意義の再検討

学術界では歴史学者らによって、カーロイらが直接的に領土解体に関わったとはいえないと指摘されており、近年新たに「十月革命」に関する研究書も出版されている（Apor 2018; Hatos 2018 など）。「十月革命」から100周年となった2018年に出版されたハトシュ・パールの研究書では、「十月革命」後の解釈や評価にとらわれず、同革命を経験した人の残した言葉や行動に焦点を置いて、同革命がどのようなものであったか検討している（Hatos 2018）。

カーロイ政権成立時は、保守的な階層なども含め、ほとんど全ての階層の人が政権を支持した。ホルティ体制下では、カーロイ政権成立時にカーロイを支持した人々もカーロイを非難するようになるが、少なくともカーロイ政権成立当時は多くの人々が講和条約や国内の民主化をカーロイ政権に期待していたのである。1918-19年革命期が領土解体に至る前史として政治的に位置づけられる傾向の強い現在において、領土解体という結果にとらわれず、当時の人々が革命をどう捉えていたかに着目しながら1918-19年の歴史的意義を再検討することが必要だといえる。

ハプスブルク帝国からの独立を目指した1848年革命や、ソ連による支配からの脱却を試みた1956年革命など、ハンガリーでは歴史上何度も民主化や自由のために人々が立ち上がってきたが、1918年の「十月革命」も人々が民主化を求めた結果起こったものである。オルバーン政権の政策は、メディア規制やオルバーン支持者によるメディア買収（『AFP BBnews』2020年6月22日；ポリヤック 2017: 149-159 など）、新型コロナウイルス対策として首相の権限を大幅に拡大する法の制定（『日本経済

新聞』2020年3月31日)、政敵少数者らへの表現を規制する法の制定など(『毎日新聞』2021年6月25日)、様々な点で真に民主主義的な政治を行っているとは言い難く、民主主義とは何かあらためて問い直すことが求められる状況にある。オルバーン首相がハンガリー史における災いだともみなしている「十月革命」の意義を、今こそ問い直すべきではないだろうか。

注

- 1 同革命は「秋薔薇革命 *őszirózsás forradalom*」などとも呼ばれているが、革命の中心的人物が「十月革命」と呼んでいたことから、本稿では「十月革命」と表記する。
- 2 本稿ではハンガリー系の人名は姓・名の順で表記する。
- 3 過去の「連帯の日」に起こった右翼団体によるデモについては Győri and Molnár 2020:18などを参照。
- 4 「カーロイ裁判」については Schönwald 1985などを参照。
- 5 なお、1919年の共産主義政権下では共産主義者らが1918年以前の政治的権力者や保守派などを迫害する「赤色テロル」を展開していた。
- 6 両者の対立については辻河(2012)で詳細に論じられている。

参考文献

書籍・論文

辻河典子(2012)「現代ハンガリー・ナショナリズム試論—2010年のカーロイ・ミハイ像をめぐる論争から—」『比較文学・文化論集』29:48-67。

ポリヤック、ガボア(鈴木秀美訳)(2017)「ハンガリーのメディア規制の危機的問題」『慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』67:149-159。

([http://www.mediacom.keio.ac.jp/wp/wp-](http://www.mediacom.keio.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2017/03/ab4dbb4750fd4c94deae1195a1f956e0.pdf)

[content/uploads/2017/03/ab4dbb4750fd4c94deae1195a1f956e0.pdf](http://www.mediacom.keio.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2017/03/ab4dbb4750fd4c94deae1195a1f956e0.pdf) 2022年11月23日アクセス済み。)

- Apor, Péter(2018)*Kérdések és válaszok 1918-1919-ről*. Budapest: Napvilág Kiadó.
- Gál, Árpád – Szerdahelyi, László (1929) *A magyar nemzet története a mohácsi vésztől napjainkig: a polgári fiúiskolák IV.osztálya számára*. Budapest: Athenaeum.
- Györi, Lóránt and Molnár, Csaba(2020) *Shadows of Trianon*. Budapest:Political Capital Kft. (https://www.politicalcapital.hu/pc-admin/source/documents/zinc_revisionism_country_report_hu.pdf 2022年11月23日アクセス済み。)
- Hajdu, Tibor(1968) *Az 1918-as polgári demokratikus forradalom*. Budapest: Kossuth Könyvkiadó.
- Hajdu, Tibor(1978) *Károlyi Mihály: politikai életrajz*. Budapest: Kossuth Könyvkiadó.
- Hatos, Pál(2018) *Az elátkozott köztársaság*. Budapest: Jaffa Kiadó.
- Jemnitz, János és Litván, György(1977) *Szerette az igazságot: Károlyi Mihály élete*. Budapest: Gondolat Kiadó.
- Jobbit, Steven(2019-2020) The Significance and Legacy of 1918-1919. *Hungarian Studies Review*. vol.46-47: 66-71. (<http://hungarianstudies.org/blog/wp-content/uploads/2020/10/HSR-Vol-46-47-2019-2020.pdf> 2022年11月23日アクセス済み。)
- Schönwald, Pál (1985) *A Károlyi-per*. Budapest: Kossuth Könyvkiadó.

新聞・ネット記事

- 『日本経済新聞』2020年3月31日「ハンガリーの首相権限、無期限に拡大 「独裁」か」 (<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO57458480R30C20A3000000/> 2022年11月23日アクセス済み。)
- 『ビジネス短信』2022年4月6日「ハンガリー議会総選挙、政権与党が2010年以来4回連続で勝利」 (<https://www.jetro.go.jp/biznews/2022/04/ca9b60f712ba7528.html> 2022年11月23日アクセス済み。)
- 『毎日新聞』2021年6月25日「欧州各国、ハンガリー『反LGBT法』に懸念 EU首脳会議」 (<https://mainichi.jp/articles/20210625/k00/00m/030/063000c> 2022年11月23日アクセス済み。)
- 『AFP BBnews』2020年6月22日「ハンガリー有力ニュースサイト、編集権独立

の「重大な危機」警告」(<https://www.afpbb.com/articles/-/3289712> 2022年11月23日アクセス済み。)

Magyarország Nagykövetsége Róma, A Nemzeti Összetartozás Napja.
(<https://roma.mfa.gov.hu/news/a-nemzeti-oesszetartozas-napja> 2022年11月23日アクセス済み。)

Speech by Prime Minister Viktor Orbán on 15 March. (<https://miniszterelnok.hu/speech-by-prime-minister-viktor-orban-on-15-march/> 2022年11月23日アクセス済み。)

Telex. 2022.6.5., A sátáni világrend újabb Trianont akar - tüntettek a nemzeti radikálisok az ukrán nagykövetség előtt. (<https://telex.hu/belfold/2022/06/05/trianon-felvonulas-torockai-nacik-ukrajna-zelenszkij-haboru> 2022年11月23日アクセス済み。)

Telex. 2022.2.26. Fact-check: Nem zajlik népirtás Kelet-Ukrajnában, de valóban nem könnyű a helyiek élete. (<https://telex.hu/ellenorzo/2022/02/26/orosz-ukran-valsag-fasizmus-vlagyimir-putyin-vad-nepirtas> 2022年11月23日アクセス済み。)